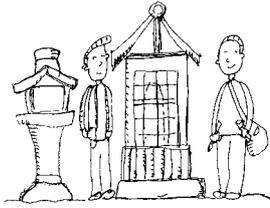


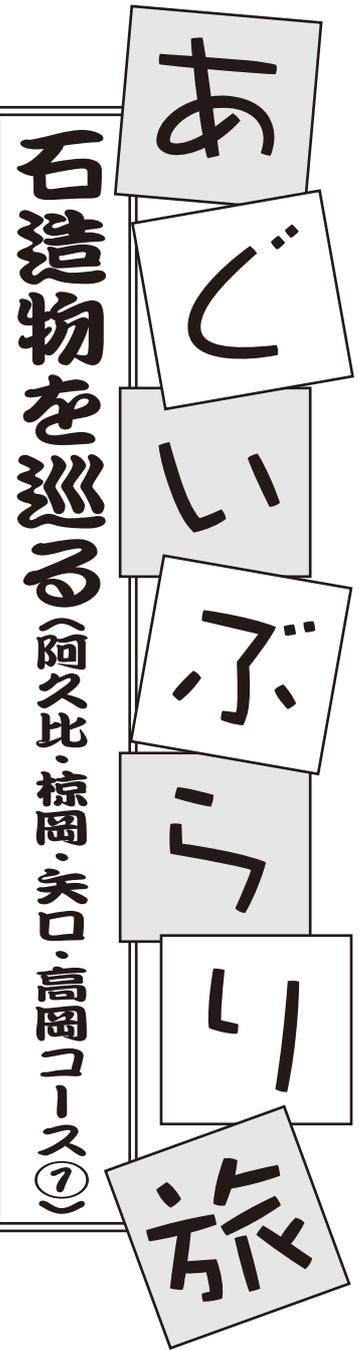
# シリーズ

## 阿久比を歩く ①①⑤



阿久比神社入口に立つ「社標」

新しいコースで石造物巡りの「ぶらり旅」を続ける。  
阿久比神社の「阿久比神社社標」を見る。鳥居の手前に「郷社 延喜式内 阿久比神社」と大きな文字が記された、見上げるほど高い社標が立つ。  
平安時代初期の宮中の記録が書かれている『延喜式』。その第九と第十の「神名帳」に記載されている神社を「式内社」と呼ぶ。



石造物を巡る(阿久比・棕岡・美口・高岡コース⑦)

式内社は由緒正しく、格式が高い神社だといわれる。阿久比神社は神名帳に「知多三座」の一つとして記され、はじめにあげられていることから、尾張知多郡の「一宮」と呼ばれていたようだ。  
「一番はじめは一宮(いちのみや)」と歌われるくらいだから、一宮と呼ばれることは、すごいことなんでしょうね」と友人がわらべ歌を歌いながら言う。「確かにそうだねえ。一番はどこだったかなあ」と私が聞く。「……………」  
静かな神社境内だが、大晦日から元旦に日付が変わるころ、多くの人々にぎわいをみせるだろう。  
阿久比神社を後にして、細道を南へ進む。次に「六十六部供養塔」を探す。『町文化財調査報告』では、「六十六カ所の霊場を巡礼して納経する信仰があり、修行者を六部ともいう」と解説がされる。  
道路脇の一面に一基の常夜燈とお堂を見つめる。お堂の中をのぞく。中央に文字が刻まれた高さ五十七センチ

ほどの石がまつられる。  
お堂近くの民家を尋ねる。男性が「六部さんのことだね」と話を聞かせてくれた。  
修行途中の六部が行き倒れてしまふ。疫病がはやり、村人がこの地で亡くなった六部の「供養塔」をまつり、願を掛けると不思議に疫病が終息したという。  
「今で言うインフルエンザだろうね。医学に勝る先人たちの思いがかなったということかなあ。春祭りには必ず「六部さん」の前で子どもたちが囃子の奉納もするし、阿久比地区では大切なものだよ。公会堂の近くには「行者さん」もいるし、帰りに見ていくといいよ。」  
「地域で大切に守っていく。難しいことですけど、素晴らしいことですよねえ」。行者堂に手を合わせた後、目に映った、それぞれの民家から温もりが伝わってきた。



お堂の中にまつられる「六十六部供養塔」